

ひまわりからの

メッセージ

130号

2022.7.11

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子



今年は梅雨が早くに明けました。

私が幼い頃、病弱の母に代わって近所のおばあさんが子守をして下さったので、私の友人と言えは、おばあさん「繫がりの」高齡の方でした。そんな方々から「葵の花は下の方から咲き上がって、梅雨が明ける頃に花も終わるんだよ」と教えてもらったことを思い出します。徳川家康の葵の紋は、葉のデザインですが、それは、京都の葵祭で有名な賀茂神社の神紋から由来していると知ったのは、つい最近のことです。今年の花は終わって、そろそろ夏の花が咲きはじめることでしょう。

ところで、私は六月下旬頃から西濃圏域の高等学校に伺っています。義務教育終了後、高校を休学したりやめてしまったりして苦しんでいる生徒さんが少なからず存在することを知って、センターとして何か一緒に考えていくことはできないだ

ろうかと思うからです。この思いは数年前からありました。コロナの感染拡大でのびのびになっていたのです。

高校に伺ってみると以前にお目にかかった方もいらっしゃいました。中でも二十数年ぶりにお会いしたのは工業高校の桐山明宏校長先生でした。はじめてお会いした時、桐山先生は、岐阜県の教育史の編纂に携わっておられて、私が川並学園へかわなみ作業所の前身時代を書き綴っていた学級通信を取り上げて下さったのです。

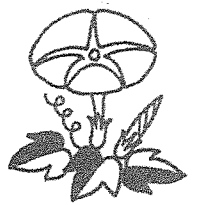
私が通信を書き始めたのは、川並学園時代でしたが、ひまわり学園に異動してから、学園により「ひまわり」を、発達障がい支援センターの今は「ひまわりからのメッセージ」を書き続けています。久れぶりに繙いてみると、一九八〇年から欠かさずに発刊してきたことになりました。遠い昔に桐山先生のご尽力で「岐阜県教育史」に取り上げていただいたことが励みとなって今に致しているのだと思います。

人の一生には様々な出会いがあります。そうして出会った人達に助けられ、支えられ、励まされて今の自分があるのだなあと、桐山先生との再会に際して改めて感謝の念を強くしました。

今年の七夕の日、皆さんはどのような願いごとをされたのでしょうか。私は、「子どもたちに素敵な出会いがたくさんありますように」と、願いを托しました。

一本の電話

「何かできることは……？」



先日のことです。K・Kさんから電話がありました。(お母様は名前を出して下さって良いですとおっしゃったのですが) 日本人の承諾が得られていないので、イニシャルにしました。在宅だったうおさうく承諾して下さいたと思います(……)

Kさんは体の不自由さがある車椅子で移動をされています。私が出会ったのは三歳の頃だったでしょうか。目がくりくりとした利発そうなかわいい男の子でした。

Kさんは、「今、大学生になりました。ぼくは今まで多くの人に助けられ支えられてきて今があります。でも今度は困っている子どもたちとかがいれば何かお手伝いができないかと思っています。もし何かあれば言っておさい。」と言い、自分の夢を語ってくれました。

Kさんの話を聞きながら、私は今までの歩みを振り返っていました。辛かったであろうリハビリの日々、小学校ではノートの方眼のグレーの線がはつきり見えない彼のためにお母さんが黒線を書いておられました。水泳で頭角をあらわした彼でしたが中学校から高校へ進む時には、

中学校の校長先生から入試に向けて配慮していただけるようにとの文書も出され、彼が言うように本当に多くの方々が支えてきて下さったと思います。もしかしたら、生きていくことが辛いと思った日もあったかもしれませんが、ご家族の支えもあり、たくましく成長されたのだなあ……と胸がいっぱいになりました。もちろんこれからも様々なことがあるでしょうが、きっとKさんは自分を見つめながら生き方を探っていくに違いないと思います。高校時代に偶然コンビニで出会った時には水泳で鍛えた上肢の筋肉の厚みにおどろかされた私でしたが、あの時よりもっとたくましくなったKさんに会える日を楽しみに電話を切ったのでした。

自己理解の大切さ ～高等学校を訪問して～

Kさんのことに言及したのには理由があります。実は六月に入ってから私は高校訪問をしています。何故そんなことを始めたのかと言うと、成人期の相談を受けるようになって、義務教育後に家にひきこもってしまったり、進学や就労で困っている人たちに会おうたびに、もっと早くに気づいてあげることはできなかったのか、私達に何かできることはないのかと思うようになったからです。しかも、高校訪問で知らされたのは、サポートブックや個別支援計画を無かったことにしたいという保護者の方

が少なからずいらつしやるという現実でした。

発達障害という診断を受けたことがいけないことでしょうか。サポートブックを作り、幼児期から配慮してもらったり支援をされてきたことが耻ずかしいことなのでしょうか。発達障害の特性をもつ子を園も学校も支えてくれてきたのではないのでしょうか。家庭でも心配りをして育ててきたのではないのでしょうか。

幼児期、ことは遅かったり、落ちつきなく動き回ったり、感覚過敏があって芝生や糊を嫌がったり、偏食もあってお母さんは苦労されたのではなかったでしょうか。保育園では集団に入れなかったり、友だちと上手にかかわれなかったり、トラブルもあったかもしれません。大人しくて不安な子は園に行くのを嫌がり大泣きの毎日だった思い出もあるでしょう。

小学校への引きつぎ会では、お母さん達は皆、真剣に自分のお子さんを理解してもらうとうとなさっていました。それでも多動な子はじっといられず離席や勝手な行動もあったことでしょう。通級指導教室で SST やビジョントレーニングなどもあり、小学校を卒業する頃には特性も目立たなくなってきたことでしょう。担任の先生からは「勉強もできているし、サポートブック（スマイルブックなど）の引きつぎも必要ないでしょう。」等と言われて、すっかり安心された方もいらつしやることでしょう。

そして中学校では、生徒たちは本当に静かに学習に取り組

んでいる姿が見られます。もちろん登校しづりや不登校の生徒も少なくはありませんが、一昔前の荒れた中学校のイメージはありません。学習が分からなくても小学生の時のように暴れたり暴言をはいたりする姿はなくなっているようです。保護者の方たちも「せめて高校は卒業してもらいたい」「入れる高校へ」「みんなと同じように……」という願いをもって進んで行かれるようです。

そして、おそらく「皆と同じように」という願いの結果が「スマイルブックは持っていません」「個別計画は要りません」という方向に進んでいくのでしょう。でも、本当にそれで良いのでしょうか。今までの支援は必要のないお子さんだったのでしょうか。これから先も本当に必要のないお子さんなのでしょうか。そして何よりもあなたのお子さんは誰の助けも借りずに今まで生きてこられたのでしょうか。

確かに発達障害がいのお子さんは見た目の違いはないかもしれませんが、Kさんは脳性まひでしたから、多くの人達が心を寄せ、支えて下さったに違いありません。本人も自覚せざるを得ないという一面もあったことでしょう。でも、あなたのお子さんに對しても、その特性を理解し、必要だと思われる支援がなされてきたのではないのでしょうか。

私は、子どもたちに自分が育ってきた道を知ってもらいたいと思うのです。小さい時はどんな子どもだったか、どんなこと

に興味をもっていたのか、そしてその子自身が困っているのはどんな所で、それを周りの人たちがどのように関わってくれたのかということを知らせてあげてほしいのです。「あなた一人で大きくなったのではない。多くの人たちが支えてくれたのだ」と知らせてあげたいのです。そしてこれから「誰でも苦手な所はあってもいい」と教えるべきだと思います。

発達障がいと言われた保護者の方たちは、もしかしたら必死になって「皆と同じように」と思って育ててこられたのかもしれませんが。「勉強ができれば何とかなる」と思ってこられたのかもしれませんが、けれども、社会で生きていくということとは、嫌なことでもやらなくてはならないし、相手の思いも汲みとていかなければなりません。人の話にも耳を傾けなければならぬのです。周りの人たちが何をしているかを知って、自分の行動を制御していく力も必要です。でも、もし仮に子どもたちが自分の良さも苦手さも十分にわかっているのなら、人に助けを求めることもできないでしょう。

サポートブックを作っておられるのなら、お子さんにそのことを話して下さい。サポートブックをもったことは恥ずかしいことでもないし、駄目なことでもありません。堂々と持つていてほしいと思います。先生方も、サポートブックをやめさせようとか支援計画を無しにしようとか思うのではなく

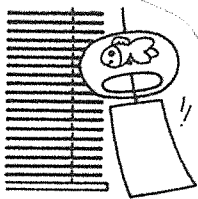
皆で支えていくことがその子の未来の自立につながることをのだと考えていたと思います。

人は誰も一人では生きていきません。私も多くの人達に支えていたいて、今が在ります。私たちは、子どもたちの障壁にならなければならないと思います。

子どもたちが今後大きくなり、思春期を経て大人になっていく時、必要なことは「自己理解」です。もしも私たち周りの大人たちが子どもたちに誤った自己理解をさせてしまったとしたら、それは私たちの責任ではないでしょうか。

「俺は悪くない。悪いのは親だ」とか「悪いのは周りの人たちだ」という認知をもたせてしまったとしたら、本当に不幸なことだと思います。その点をよく考えて下さる。将来の自立に向けての親子の会話を始めていただきたいし、先生方のご協力もぜひお願いしたいと思っています。

私たち一人ひとりが「出会えて良かった」と思ってもらえる大人でありたいです。私もその一人になれるように生きていかなければ……と、思っているのです。……が……？



お知らせ

八月は成人の方の相談にあてるので次回のセンター親の会は九月十二日です。